連載

チャレンジする Someone NEWS ～挑戦者の履歴書

第⑯回

園浦 眞佐子 氏（アートディレクター、いりや画廊役員）
――アーティストを育てる、文化をみせる

一般社団法人 洸楓座　代表理事　佐藤 建吉

▼アートを身近に上質に

筆者が大学に入り、習った英語の教科書は、『知恵の技巧』（the art of wisdom）であった。Artには知恵という意味もあるが、いわゆるアート（芸術）としてとらえることもできる。筆者は、こうして大学の時からアートに関心を持ってきたが、近年の地域活性化活動においても、アートは大切である。文化力であり、また地域力ともなるからである。アートには、そうした効力ばかりでなく、環境としての無為の「ちから」もある。さらに言えば、アートとともに暮らすことが出来れば、それがない場合よりも「ゆたか」な気分になれるかもしれない。そういう意味では、アートは、筆者が大切にする「状況」や「できる状況づくり」への重要なテーマとなる。

アートは、このように幅広い魅力をもつのではあるが、景気や経済にも影響される。現時のコロナ禍でアートは、展示の機会を制限され共感の場を失った局面もあるが、家庭や個人的な局面では救いとなったなど、多様なエフェクトをもつ。今回のコラムでは、そうしたアートと向き合い、より身近で上質なアートをつくり出そうと挑戦する《アートディレクター》を現職とする園浦眞佐子氏に、スポットを当てる。

▼アートをつくる・まもる・つなげる

本コラムの第⑬回では建築家・七字祐介氏を紹介したが、筆者の園浦氏との出会いは、七字氏に由来する。それは、七字氏に勧められ、いまから10年ほど前になろうか、建築美術工芸協会（AACCA）のメンバーになったことにはじまる。AACCAは、その名のように「建築」「美術」「工芸」の三つの分野の方々からなる活動組織であり、建築家や彫刻家や陶芸家など、こうした分野で創作的な仕事をしている作家の集まりでもある。筆者は、調査研究委員会の中で友好と情報を獲得した。その中で、「新制作展」を企画運営する日高単也氏などとも知り合った。

新制作展といえば今回紹介する園浦氏も、テキスタイル（織物や布地）作品を出展し受賞歴もある。筆者にとっては、展示作品を観るだけでなく、作家や運営側との関わりなど、交流と体験をさせて頂いた。創る、見せるなど、美術館や博物館のミッションは、その後の「エコミュージアム」を冠した地域活動に直結している。

園浦氏は作家であり、アートディレクターあるが、その経歴を示しておく。同氏は、父親の海外勤務の都合で、アメリカで高校を卒業したあと帰国し、上智大学外国語学部を卒業後、カリフォルニア美術工芸大学テキスタイル科に転入し、クロス素材の作家になった。その後、デザインの本場、デンマークにて、フアイバーアーティストのイバン・ブロンダムのアシスタントとして勤めた経験もある。

園浦氏自身の作品

《個展》としての作品展示では、1995年、日本航空オペレーションセンター（千葉・成田）／1996年、同和火災ギャラリー（東京・日本橋）／1999&2000&02&03年、Caelum Gallery（アメリカ・ニューヨーク）／04年、ギャラリー16（京都）／2004年、元麻布ギャラリー（東京・麻布）／2004&05&06年、小野画廊（東京・京橋）／2007&08年、画廊るたん（東京・銀座）等がある。

また、《グループ展》としては、1998&2002年、Caelum Gallery（アメリカ・ニューヨーク）／2005年、Intern of The East（タイ・バンコク）／2006年、「ルタン選抜展」画廊 るたん（東京・銀座）／2011年、新制作協会「新作家賞展」等がある。結果として、世界工芸COMPETITION（金沢）や、朝日現代クラフト展、新制作展での入選受賞を果たし、新制作展では新作家賞を受賞。同氏の作品のうちいくつかは、個人や公共の場に《コレクション》として展示されているという。写真に示した園浦氏の作品の題名は、『大丈夫、まっているから』であり、素材は布・アルミ・木材・ステンレスで、高さが120㌢、直径40～50㌢と大きい。

その後は、アートに関わる実務、運営側に転向、2010年には、ブリッジングブレイン合同会社の役員、2013年からは現職のいりや画廊でアートディレクターをしている【註1】。いりや画廊は、株式会社ビーファクトリーが経営しているが、その代表は東京芸大大学院彫刻専攻修了の中村茂幸氏である。アートを創造る（つくる）、保守る（まもる）、接点る（つなげる）を、事業の目的としている。具体的には、中村氏の関わりの深い金属彫刻をはじめ、その他のモニュメント、パブリックアートなどの造形物について、企画・デザイン・制作・設置・施工、メンテナンスなどをカバーする総合美術系制作会社として銘打っている【註2】。この精神は、後述するように、いりや画廊のアート展開にも活かされており、アートをより身近にする試み、すなわち挑戦を行っている。

筆者は、園浦氏に千葉大学の都市環境システム学科の「専門英語」の講師を3年間依頼し、環境とアートなどに関わる新しく&実践的な英語会話表現について教授して頂いた。学生にも好評であった。

▼江戸&東京の地域文化

園浦氏は、海外経験もあるが、活動の場は東京である。東京は、江戸としての歴史と文化を継承し、世界に発信する責務を持つ。その原点は日本人の暮らしや心の中に生き続ける必要がある。江戸の地域文化をアートにするという命題が生まれる。

高層ビル化した東京ではあるが、地域住民が自ら楽しむ街づくりや行事、しかも風土・地域に根差した文化、地域の伝統に対して誇りを感じ、それぞれが地域を支える大切な一員であることを確認し、住民の一体感を共有することが大事となる。この意味で、AACAの活動において、園浦氏が提案したアイテムが「提灯」であった。

「浅草の提灯、江戸火消しの提灯、テレビでよく見る岡っ引きの提灯、飲み屋の提灯など。提灯はいつの時代も何故か消えることなく、その役割を果たしています。シンボルであったり、サインであったり、道行く人の街灯であったり、その役割は場所や使う人によって、さまざまである。なぜなら提灯にはその美しい姿に実用性が備わっているからと、考えられる。そのフォルムと様々な色、書かれている文字や模様は、人々をほっとさせるだけでなく、本来の役割を全うすることも提灯が現在まで廃れることなく愛されてきた理由ではないだろうか。」

以上のように、この提灯を実用的パブリックアートと位置付けたいと、園浦氏は述べている。身近なアイテムを掘り起し守ろうとする気概が感じられる。

▼パブリックアート再考

現時のコロナ禍においては、さらに状況が悪化したが、アートは、既述したように景気に左右される。アートに対する親和性は、国民や国情に左右される。パブリックアートの重要性が叫ばれる。AACAの活動においても調査研究委員会では『パブリックアート再考』（2009年）をまとめた【註3】。

園浦氏は、海外経験から『パブリック再考』で、ニューヨークと東京・六本木のミッドタウンにおけるパブリックアートについて次のように比較検討している。ニューヨークでは、パブリックアートは市民が自ら守り整備するという雰囲気があり、掃除やメンテナンスをしている。それは、寄付が盛んな国情や、交通違反の罰則に市街掃除を課せられるなど、個人と市街（パブリック）に一体感をもつ。一方、六本木では、開発施主、建築家、ランドスケープアーキテクトなどが主体的となって開発計画されて話題づくりが行われ、特徴的なパブリックアートが誕生している。都市に新しい生命を吹き込む都市とアートの関係が始まったといえる。こうして身近なパブリックアートが、国民や市民のアート感覚を変える状況にある。同氏は、そんな「身近さ」を大切にしている。

▼アートの展示機会をつくる

アートの普及のため園浦氏は、「いりや画廊」のアートディレクターとして、若手作家の支援に努めている。最近の9月4日までの展示は、自社画廊が主催した若手作家支援事業としての「いりやKOUBOU」での大賞受賞者作品展であった。女子美大大学院を修了したばかり飯島祐奈氏の石の彫刻展である。大理石や砂岩や御影石の彫刻作品が展覧された。

力作を展示し、作家の認知ばかりでなく石材アートの新風について周知する機会となった。筆者は、いりや画廊と園浦氏の事業目標に賛同し、作家と作品の普及を広めたいと、ある構想を思いついた次第である。パブリックアートとして世間の眼目や心情の中に「アート」が空気感となることを、ともに望みたい。

若手作家はもちろんであるが熟年の作家も、経費の面で作品展示や普及には苦労する。いりや画廊は、小規模の1週間単位の展示の場として人気となっており、向こう2年間の展示予約がされているという。東京&江戸ゆかりの作品展示からコンテンポラリーアートまでの展示の機会を提供し、作家や作品の掘り起し、アートの普及に努めている。自身が作家でもあり、海外と国内に周知の園浦氏のチェレンジは今後も続きそうだ。

【註1】いりや画廊 https://www.galleryiriya.com/

【註2】(株)ビーファクトリー https://www.befactory.net/

【註3】『パブリックアート再考』 http://www.aacajp.com/wp-content/uploads/2019/03/pa-saikou-s.pdf

★☆★☆★☆

本連載の前回（2021年8月30日発行・第1093号・10ページ掲載）本文中に、以下のように記載の誤りがありました。

◆第3段23行目：
【誤】室町時代→
【正】鎌倉時代

◆第6段3行目：
【誤】祖父により→
【正】24世宗家により

◆第7段42行目&第8段3行目：
【誤】福太郎→
【正】富太郎

本件でご迷惑をおかけした、善竹十郎氏および関係各位様にお詫びし訂正させて頂きます。

いりや画廊の展示物とともに

いりや画廊／エントランス前にて

若手作家・飯島祐奈氏と作品